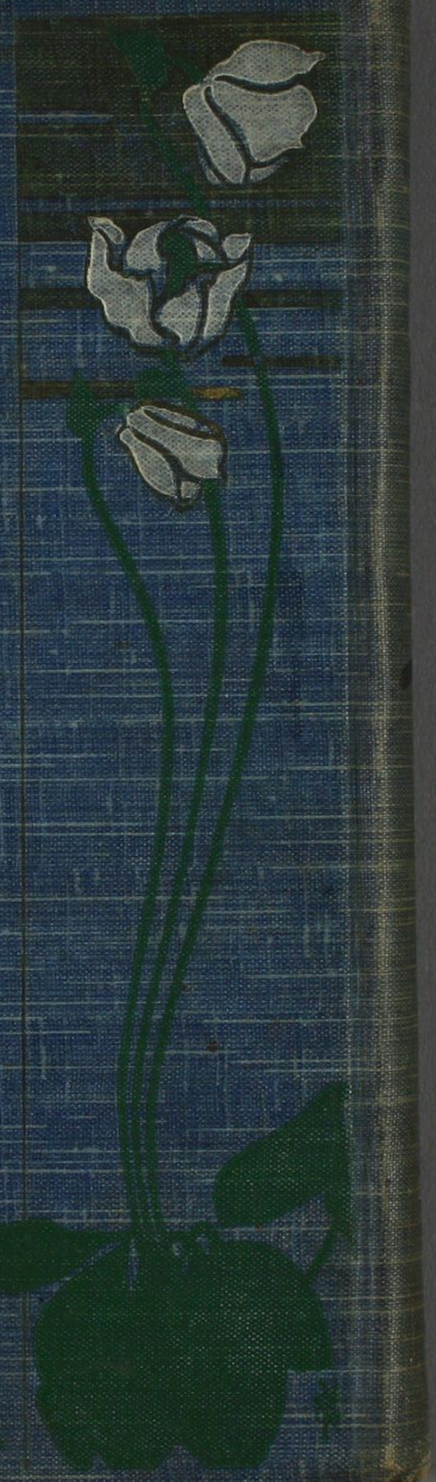
新庭あけぼの



HIYER

佐藤信淵選

歌集

南洲遺

修文館

佐々木信綱選

歌集

あけぼの

修文館

竹柏園研究會同人の長短の歌をあつめて、世におほやけにせむとす。名におへる「あけぼの」の美しきはえこそは未だしけれ、たへなる詩歌の國の朝日の光うけて咲きいでし花の數々、同じ道ゆく人々の心々よりは、さるかたに捨てがたき色香もあらむかとてなり。

佐々木信綱識

歌集 あけぼの 目次

我世の春（短歌）……川田順……一
旋風（同）……石榑千亦……二七
山かげ（同）……印東昌綱……五三
春雨小傘（同）……木下利玄……七〇
志のび音（同）……新井雨泉……八七
落穂（同）……村岡典嗣……九四
始皇帝（新體詩）……小花清泉……一二〇
坑夫（同）……一二三
一刹那（同）……一二六
我友（同）……一二八
旅籠屋（同）……一三〇

歌集

あけぼの

佐々木信綱選

我世の春

川田順

水よ石よ十日の契はかなくて雨にわかるゝ塩原の山

朝月夜（短歌）……片山廣子……一三二
にげゆくかげ（同）……橘糸重子……一五八
夕もや（同）……井關照子……一六八
姫蔦（同）……吉光寺朝子……一八三
緋桃（新體詩）……大塚楠緒子……一九七
すて石（同）……一九九
華嚴（同）……二〇一
お百度詣（同）……二〇七
夜（同）……二〇九

都には早すたりつるはやり唄うたふ聲あり山
かげにして

世をかへて新たに君を戀ひむ日もおなじ聲も
てうたへ鶯

君やたれ神か少女かまどはれつ此世に似ざる
花蔭にして

身を忍ぶ駕籠のすだれをそとあげて親里ちか
き長谷の山見る（梅川忠兵衛）

笠置山夜討が攀ぢしからめ手の岩かげさむき
蔦紅葉かな

とこしへに昨日の罪のまるされて今日の誠も
捨てらるゝ世や

幾たびか思ひせまりて佇みし昨日の岸のうき
くさの花

大空に燃ゆる火の山今裂けて身を埋むとも心
のこらじ

花の國大和こひしも君を生み君を葬りし大和
こひしも（憶亡友土倉六郎君四首）

二十年の清き命もともしきにおくつきめぐる
紀の川の水

花にあらずこの松蔭の墓ゆゑに我は志のばむ
み吉野の里

かなりやを二籠つりて歸るかなさびしき山の
おくつきの樹に

水も空も雲も高嶺も暮れにけりわが道むなし
秋のゆふ風

袖につく草の實悲し人も我もおもひ捨てたる
谷かげにして

二月のついたち月に梅折りて君が生れしその
夜志のばむ

君追ひて迷ひ入りぬるまぼろしの杜うつくし
き白藤の花

れぼろ富士みまもる君がうるはしの瞳にうつる海の濃緑

さらば君この潮の音を身にしめてかゝる渚に後も生れむ

國の花晴信去りて四百年春いたづらに甲斐の山青き（甲府途上二首）

のる駒の鈴が音かすむ雨のなかに甲斐の都は低うして見えず

胸のうちをかたみに知りし此夕べ空に月ありいざ共に醉はむ

醉へや君こゝろの春を數へ見ば十年はあらじ人の命の

曙の富士にむかひて網引せし五十年春秋身は老いにけり（北條三首）

姉君の御言葉きかで一人こし都の秋のそゞろさびしき

二年を都にいでしいもうとの恥ぢてうたはぬ

安房の舟唄

山さむき廿日の月にひゞくなりふもとの海の荒波のこゑ(清澄山)

我舟を沖の小舟にこぎよせて鱸(すゝき)あがなふ秋のゆふばえ

風はさけび鳥はうらむる秋の空にわが悲しびのなきが悲しさ

誰が子ぞや飯をもとむる饑人に小石あたへて手を拍ち笑ふ

胸もゆる友のあざけりほゝ笑みて志のぶ夕べの鶯のこゑ

心志らぬ千人のそしり何ならず君が一言かなしとぞ思ふ

思ふ江に錨なげつるわが船ぞ波風吹くも夢は安けむ

世の常の戀とは言はじみなし兒に神の賜ひし
母と思はむ

名のはえも富の力も暫らくは心に消えてたゞ
君おもふ

醉臥せる友を殘してたゞ一人淡路にわたる夕
月夜かな（明石）

酒つくる町の並藏かゞやきて春の日ひくし菜
の花のみち

宇治寺の早き戸ざしをうらみつゝ歸る花かげ
春の夜の月

藤の花こぼるゝ雨に一人濡れぬ春はたそがれ
清瀧のみち

多度の山夕日も花もとゞまらずゆく春いそぐ
瀧のひゞきに（養老山）

御艦皆ふなよそひして時まてる佐世保の海の
冬の夜の月（明治卅七年一月）

姉はつ瀬いもうと吉野はうむりし海のおくつき吹く嵐かな（同五月）

湯なぐさみ廿日飼ひつる小兎に別を惜しむ塩原の宿

荒草の花さく岡に國見して十年あひ見ぬ人をしぞ思ふ

山清き紀の川上の青淵にうぐひす聽きて筏あむかな（筏士二首）

西川のお花よいざこ夏箕までのせて下さむ山吹の溪

旅寢してこし方かたる友六人父母なきは我一人のみ（孤兒哀歌十首）

あな戀し十二の夏のはつ旅に父とやどりし牛臥の濱

里親に負はれて歸るいもうとを母と見送る五月雨の門

卵子とりて池の水鷄を追ひし罪母はとがめず
たゞ笑みましぬ

をさなきに母二人もつ悲しさをかくれて泣き
し無花果の蔭

父の墓のかたへの小松刈りすてゝ今宵母をも
葬りつるはや

母君の御墓守りて姉弟のおくつき低し右にひ
だりに

わが昔母の昔を乳母にきゝて歸る野みちの冬
枯のいろ

いもうとの嫁いり姿なき母に見せまつらばと
乳母の泣くかな

父ゆきて三たび家居をすみかへつちひさき庭
の紅梅の花

碓氷四里紅葉を染めて毛の國の稻葉にわたる
夕づく日かな

熊の兒に餅なげやりて紅葉ほめて峠の茶屋に
一人休らふ

秋ふかみ湯の宿とぢて人もなし紅葉みだるゝ
霧積の山

谷ふかきすみかにかへる山賊の松の火に照る
蔦紅葉かな

人一人いのちにかへて思ふこと君は見るらし
花草のごと

けふ三年人の誠をよそに見ていまはの夕べ何
か泣くらむ

誠なき胸よりいづる罪とがを運命の神におほ
せずもがな

君ゆくも死なじの誓わすられつあまり悲しき
夕雲のいろ

かくて今海山とほく去りゆかば君をうらむと
見えむ悲しさ

ゆきあひし三つの山駕籠一つにはつみあふれ
たる秋草の花

身を捨てばかゝる淵にと人笑みぬ眞萩ちり浮
く早川の水

囚人(つみびと)ら身はつながれて石はこぶ河原うつくし
つゆ草の花(早川所見)

なでしこのむれ咲く岩をあらけなく槌もてく
づす石橋の山

樹かげより松の實なげて岩淵に釣する兄をお
どろかすかな

糸たるゝ青垣淵に影みえてうき人お花もの言
はず行く

心さへ身さへさゝげし人をおきていかなる幸
か君もとむらむ

ほゝゑみていまはの枕そばだてし面影みゆる
鶯のこゑ

冷やかに笑みて聽きつる一言の誠知りえてそぞろ悲しき

戀すべき二人ならぬを花蔭に夕月夜まで殘りけるかな

ゆく春や大木曾川の岩こえて美濃にながるゝ山吹の花

君に書く玉章の文字一つ〳〵炎と燃えてさめし夢かな

遠つ島に二人いなむと言ひし人おもひぞいづるうき秋にして

心にもあらで嫁ぎしこの春の花ちる雨を病みて聽くかな

人妻となりて三年のこの夕べうらぶれし君に逢ふが悲しさ

おなじ恨おなじ嘆の世をすぎむ十年二十年はなれ〳〵に

後の世を頼むもはかなかゝる人かゝる花蔭なくばいかにせむ

息のうちの苦悩(なやみ)のみにて足らむには罪の報のあまり小さき

夢か今その罪消ゆとのたまひし神のさゝやき君も聽きつや

いちごみのり眞萩花さく渚みち二里來てやどる黄昏の村(岳麓湖上吟七首)

鍬すてゝ梭の手やめて皆あふげ神の御岳に虹あらはれぬ

人の世の榮は言はじ羨まじ虹うつくしき湖(うみ)ぞひの村

雲くらき杉生の山の道つきて眞萩野ごしに湖(うみ)すこし見ゆ

鮒つりて歸る湖(うみ)べの眞萩原ゆふ日の富士となりにけるかな

ましら啼く岸のむら山そばだちて水うみくら
き夕づく日かな

狐なくこゑ肌さむみ夜涼みの舟こぎかへす片
われの月

秋はたゞ我墓去らずひゞかなむ君が好みし鈴
虫のこゑ

靈(たま)にそふ此世のかたみ若しあらば君がおも影
うぐひすの聲

後の世のうまし月夜に二人して祈らば親もゆ
るし給はむ

六年すみし須磨のあたりの名所を君に問はれ
つ夏の夜の月

君こそはわが故郷よ世の旅のつらき折々たち
歸り見む

この心ゆめ僞はなきものを春來て花の咲かむ
かぎりは

花よちれ彌生廿日の花よちれいとし藤子が黑髪の上に

わがうたふ歌をあはれと言ふ人の問はでやいなむ胸の思は

一卷の哀しき歌をかたみにて我世の春のゆくへ知らずも

旋風

石榑千亦

家毎にいさゝ小川の水をひきてあやめ植ゑたり草ぶきの里

たそがれの草川堤妻さへにちからあはせて船の綱ひく

梅雨の寒くふる夜を痛手おひし兵(つはもの)あまたぬれて船に乘る

あけぼの

雨ふぶく端嶋(はしま)のゝ嶋ゆれにゆるゝ船窓の中に
見えがくれする(松島灣二首)

きかぬ帆をさながらかけて釣舟は雨の代が崎
漕ぎなづむ見ゆ

大鳥の翼張るなす十二の櫂櫂ことゞにうご
くはたらく(石卷連作三首)

とのぐもる大河口の潮けぶり船をおほへり恙
あらすな

旋風

大樫の櫂さへふわる河口の波かきいづる人す
くひ船

馬の國岩手あがたの朝あけの雲にぞひゞくい
ななきの聲

たゞ一つとまどひいでし蚊の聲の耳にあまり
て眠られぬかな

田植すと列(つら)をつくれる小菅笠みなあふむきて
汽車を見送る

松の木に馬つなぎおきて小笠二つ緑大樹のかげに語らふ

田の畔のくれなゐの花こがねの花つみて子は待つ苗うゝる間を

見れど〳〵はてもわかれぬ桑畑の桑の中なりひな唄のこゑ

君と二人つみて與ふる桑の葉にかひこは安くゝもりすも

岸にそふ青芝山の影割きてさかまきくだる北上大川（北上川四首）

岩角のかりそめ小屋にのぼるべく水よりかけしかづら小はしご

馬にのりて馬ひく少女山そひの川そひ道を徐にゆく

鳴きやめて鶯さりぬ水きりてそと輪の船のくだるひゞきに

雌雄の雞安く眠れり桑つむとかけし梯子をとまり木にして

煙なす雨靄の中に道現れて馬あゆみ來る人あゆみ來る

草屋根に朝日かぎろふ町はづれ羽虫おさへて雞の妻よぶ

世にいづる只一すぢの通路と板を渡せり谷川の上に

山の隈川の隈毎にたゝずみて見れどもあかず山の月川の月（閉伊川）

桐の木の廣葉のかげをすゞしみと媼も出でて繭えらみする

波のあとあやをつくれる岩はなの岩を根ざしに立てる松かな

艫に立ちてかへり見すれば岸にかへる小舟にくろし其人の影

北をさす針の力を力にておぼつかなくも霧の海ゆく（連作八首）

霧の中に波白くはしる彼のはしる波のあたりや陸なるらむ

沖遠く出にけらしな汽笛の綱ひけどこたふる山彦もなし

霧のため心をくだく船長に酒をわかちてなぐさむるかな

わが船を眞中にすゑて丸く〳〵波に輪をかき狹霧たちのぼる

おぼつかな船かも島かも霧の中に霧ならぬ影のうすく見ゆるは

霧深くこめたるまゝに夕もやの船にせまり來人にせまり來

後の島きゆるともなく霧になりて前なる島の夢のごと見ゆ

あけぼの

少女子があたへし息のうつくしくやさしき息
に羽子はづみ舞ふ

夕汐のみちくる時とちぎりおきて磯の松原相
わかれゆく

はた〳〵と鳥のたちゆきしあとに來て草を拂
へば清水たぎちわく

碇うつ船と船との中きりて風より早く飛ぶつ
ばめかな

旋風

生佛今なほりまず萬燈の畫とかがやく禮盤の
上に

帆を捲きて風にそなふる遠つあふみ灘のゆふ
べを雁なきわたる

濠になかば汀になかば征矢のごと落ち來し雁
のわかれちるかな

つゝまれし千種の花にありし世の笑をゆづり
て眠る君はも

輪をかきて小魚さばしる汐入の池のつゝみに
蓼の花さく

くだけたる砲のくるまにあぐらゐて勝をまち
せの文ぢたゝむる

新藁に屋根ふきかへて天地にとみたらひたる
わが心かな

桃の枝にさくらの枝につるしたる籠のめじろ
のかはる〳〵鳴く

庭さらずあそぶ鶏かも椿花ちればかなたにや
めばこなたに

山人に薪を乞ひて火をたきて梅の花見る谷あ
ひの里

菜の花にとまれる蝶の花をすてゝ道ゆく人の
あとにさきに舞ふ

天地の靜寂やぶりて藪かげの淀める水につば
き花落つ

手拭は小猿にかして猿ひきのぬれつゝぞゆく
時雨ふる野を

星の如京の灯(ともし)のつゞく見えて道をおほひし竹
の林つきぬ

仕立あげて袖もとほさぬ衣(きぬ)あまたなき子はふ
りし寺にをさむる

胸にあまる笹生に立ちて岩志まの島うちゆす
る波を見るかな(城が島)

命の戀などつゝみけむ天が下の一人の母を鬼
とかも思ひし

盛なる梅をうしろにむしろ敷きて翁桶結ふ庭
の日あたり

桃の花かげさす椽の日あたりに姉もいもとも
雛の衣(きぬ)ぬふ

一せまち田草ぬきをへてまてる子に身は立ち
ながら乳房あたふる

夕づく日かゞやく森を眞帆うちし船一つ出でぬまた一つ出でぬ

家ごとにかへる家鴨の門川にもつれあひてはわかれゆくかな

かり人のつゝをすごきし荒熊の叫びにふるふとゞ松の山

蘆原の新穂の上に松岸の松遠ざかる家遠ざかる

行く水に隔てられたる山と山の中を結びて藤の花咲く

瑞山の鳥居をくゞる人おひて袖にもつるゝ小男鹿の群（金華山）

道づれと成にし人をかつ恐れかつたのみつゝ山みちくだる

みぞれかも雨かも降らむ曇り日のさむきあしたを山みちのぼる

あけぼの

もみぢする山また山のやまもとに家まばらなり茶の花のさく

矯められず強ひられずして白菊も黄菊も老いぬ草ぶきの庭に

ゆく道に杉山さやるかへり見ればいま來しみちに杉山さやる

霜にやけし桑の木ばたに大きなる草家一むね烟ゆたかなり

旋風

杉の森の下ぶのびゆくたに水のさゝと聲してうぐひすのなく

かや山のかやの中ゆく水うけて靜かにめぐる水ぐるまかな

飼葉まちて首さしいだすあめ牛の鼻すり〳〵に少女水くむ

道一筋萱野の萱の中たちてけむりたなびく森に消えたり

君のすむ向ひの島ゆわが島に虹の橋かゝると
こしへにもが

陸奥の津輕の迫戸の潮風にをしまがよひの船
烟這ふ

かゞなきて岩うつりする荒鷲の風にさからふ
羽がひ聲あり

柔かき小草よぎりし野の風の怒に割けむかし
らそよ吹く

つばらかに聞けや野の聲民の聲にしきのとば
り高くかゝげて

渦まきて流るゝ紀伊の潮の岬みさきかしこみ
舟遠まはる

艦つくる手斧のひゞき槌の音みなとおほひて
天にたゞよふ

雨ふくむ鳩が音さむき堂の裏におちて聲あり
木蓮の花

あけぼの

白帆ゆく大川づつみ脊の子をまばしおろしぬ
若草の上に

沖つ風山い吹けふけかさなれる雲はなれなば
母の里見む

大鳥毛すゝきの上にたゞ一つまたに〳〵の聲
遠ざかる

うたひ人うぐひす來る天地に花みなぎらしう
ぐひす來る

旋風

傘さして堤ゆく人の前になりうしろになりて
川舟くだる

三十三間堂の内外の夜はふけてわが足音にわ
れ驚きぬ

定まれる命の十年ちゞめてもこの放つ矢にさ
ちあらせ給へ

天ならば小さき星一つ地ならば小さき島一つ
わが望足る

帆の中ゆこぼれ落し如小島一つ艫のうしろに
あらはれわたる

風の神の矢面に立てる松二木草家を守りて幾
代經ぬらむ

菅笠をすこしもたげて何かいふ聲もすがたも
よく似たるかな

濁世の火山のみ寺を蔽ふ夜を炎の中に鳩舞ひ
落つる

わが背守れ背の船守れと五十反の白帆齋ひ織
りて齋ひ縫ふかな

わたつみを墓と定めて舳とき放ち艫とき放ち
港出づ今日

撫でましゝ母君今は世にまさず髪おろす日を
心やすけき

友禪の袂かさねて膝にのせてこはかりしゆめ
つくづく語る

青柳の岸をはなるゝ渡し舟赤き日がさのかさなりあひぬ

山かげ

印東昌綱

下しゆく筏筏のはなし聲秋多摩川の水にひゞきて

ありて世に甲斐ある一日我は得つ君と語らふ此若葉蔭

なまじひにいひいでて君を泣かせつるなど身一つにつゝみ兼けむ

あけぼの

今日の我が罪の笞は今日うけむ昨日の罪はと
はずもあらなむ

母君のおはさぬ知らで此夏もたづね來にける
ちゞみ賣かな

君にわれさきだちたらば君が來む黄泉(よみ)の長路
に菊植ゑて待たむ

いたづらに長き日くれて夕暮の藥のむ窓桐の
花ちる

山か

空うつくし虹たつ海の空美くし君としあらば
かかる夕べを

いづこにかあまる思をわかつべき我胸いたし
木枯の風

朝夕にゆきくと渡る多摩川の水に老たり馬の
影わが影

罪ありて捕はれたりし村長の園生さびしき姫
桃の花

あけぼの

うしなひし針はいづことさがすまに秋の日足
の早暮れてゆく

うつくしく忘れ給ひし昔かな我涙こそみにく
かりけれ

になひゆく飴屋が旗の紙旗の旗みなうごく春
の朝風

この春も都にいづる友二人我身は猶も山かげ
にして

山かげ

大川のかなたの町のとほあかり遠くうごきて
雨降りまさる

よこしまの心をさりて見そなはせ花も蝴蝶も
風に舞ひまふ

村の唄にうたはれつるもひと昔お君の頬よや
つれたるかな

今更に身のかよわきぞかこたるゝかゝらざり
せばかゝるべしやと

あけぼの

光よわき冬の日うけてとぼ〳〵といづこにか
行く老し乞食の

二夜われ同じかなしき夢を見つさはりあらす
な古里の母

新妻のうつくし妻を伴なひて伊勢にまうづる
春風の道

いひさしてうつぶく人の横顔に秋の日寒し湖
の上の船

山か げ

疑ひしよし暫しだも疑ひし小さき胸のはづか
しきかな

枇杷山のびはのこぼれ實拾ふべく若葉小道を
子等わけのぼる

酉の日の空よく晴れて我妹子が裁つや明石の
うす物の袖

生きて此門は入らじと誓ひしを何にひかれし
今日の我身ぞ

あけぼの

ふかりとて自ら絶たん命かは神は幸あれと我
を生ましゝ

阪本の十戸の村のくだり阪筧あふれてつばめ
飛びかふ

胸のうち汲み知る人もあらなくに新らし涙何
に湧きくる

うるはしき君が言の葉何かせむ心は去年の君
ならなくに

山かげ

やまひやゝ癒えてさまよふ磯づたひ波靜かな
り春日うらゝに

雨くらき旅ゐの窓の窓隣文さく音の又もきこ
ゆる

殘しおきしちごいかならむ雨まじり今宵もあ
らき木枯の風

ゆるしませかよわき妻を妻として心づかひの
君が朝ゆふ

あけぼの

折からの時雨の中を歸りゆく友の姿よあはれ
老たり

かくばかり遠くそむかむ二人とは思はざりし
よ思はざりけむ

別れての年の三とせよ君に今日語りは出でじ
たゞ涙のみ

垣ひとへ隣の寺の夕やみを盆燈籠のひかりさ
びしき

山かげ

世をきのぶ女はらから住むときく小家の垣の
山茶花の花

わが歌の心弱きをいさめては道を說きにし友
よ世になき

ありて世に悲しき事の多かるか涙の池に身は
根ざしけむ

木枯の聲の荒びに夢さめてつくづく弱き我身
をぞ思ふ

あけぼの

秋の風はだへに寒き夕暮を伯母が形見の衣(きぬ)とどきたる

わが影にそひて歩まむ人ひとりそゞろにほしき朧夜の月

君がゆくあした春雨音もなし胸に泣く身のそれに似たるか

こだまのみ我にかへりて森蔭を遠くなりゆく君がすがたの

山か げ

一さかりありてぞ花もちりぬなるいたづらなりやかくてある身の

ゆくてよしさかしく遠くつらくとも君としゆかば嬉しとぞ思ふ

通ひ船いまだかげなき朝靄の中川堤百舌なき去きる

春や昔うら若草の若きどちこゝにかたりし古里の野邊

あけぼの

こむ世又此世のごとき罪うけて同じ木蔭に泣く身なるべき

鈴鹿山けはしき阪路父の手にすがりて越えし昔戀しも

千町田の冬田の畦に一人立ちて身にこん春をたゞいつとのみ

憎みそねみ多き此世をまぬかれて君ある山をとはむとぞ思ふ

山か げ

折々は君がみ許にはせゆきて告げばやと思ふ胸のくるしさ

溫泉の里や葡萄賣りありく少女子が束ねし髪の夏菊の花

天地のひろき願はず安らかに二人住まはむ我家もがな

はる〳〵と霞む波路の安房の山あはれ六年を我ありし山

海に出づる砂山道のくだり阪なでしこ咲けり
ところ〴〵に

我うへを思ひつゞけて逝きましゝ母君こひし
梅雨の雨

秋風に病かろしと傳へてよ鏡が浦の島に松に
人に

一時のなげの怒をおさへかねかよわき人を又
去かりつる

賣家の札を殘して山中のわら屋の主人（あるじ）いづち
いにけむ

もろこしを遠き旅とは思ほえずおもひます國
猶遠くあらむ（兄君の清國に物せられし時）

春雨小傘

木下利玄

雨晴れて燕とぶ町のかげ日なたかげ行く乞食
日なた行く少女

二人には春雨小傘ちひさくてたもとぬれけり
菜の花のみち

雲うすくあかるくなりて鶏なきて五月雨晴れ
ぬ山かげの村

君もわれも小さくなりて蕗のかげに雨やどり
せし夢を見し哉

ちめやかに卯の花くたしそゝぐ夜を泣きてと
つぎし姉の上おもふ

藪かげの暗き小川の暗き水におちてはちづむ
花つばきかな

眞萩ちるあしたの雨にそぼぬれて友とまうづ
る妓王妓女の墓

いもうとの小さき歩みいそがせて紅かひに行
くうす月夜かな

蛇の目傘お高祖頭巾の藤いろに人うつくしき
春の雪かな

寝覺して衾をかくるはたごやのあけ方寒きこ
ほろぎの聲

田を埋めて村ひろがりし村はづれあひる飼ふ
家紙をすく家

蛇の目傘門にほしたる裏町の日なたのどかに
桃の花散る

父母にむかへられしは夢にしてくらきみなと
に舟は泊てにけり

雨に濡れて旅人あまたつきにけり奈良の宿屋
の春の夕ぐれ

萌えそめて未だやはらかき鬼あざみいつより
針の生ひむとすらむ

母君のみ墓まうでの歸り道かたゐに物をめぐみけるかな

かや山に一本たてる大杉の梢てらして月は登りぬ

藥師みち日はあたゝかに野菊咲きて遠く聞ゆるにはとりの聲

眞清水のたへたる調きゝながら咲きて散りけりひな菊の花

姥子より湯の香吹きくる夕風に牧場の小艸露亂れ散る

くゞり戸の障子のあかりところ〴〵時雨さびしき宵の町哉

野菊一むら水をおほへるいさゝ川ゑらべ寂しく野は暮れにけり

村はづれ菜畑の中の村芝居囃子にぎはしおぼろ夜の月

御軍のかちを祝ふと御旗たてし町のはづれに
富士の高峰見ゆ

旅衣みさゝぎの山の雨に濡れて春もさびしと
思ひける哉

大空に白き雲一つ湖の面にそのかげ一つ山の
上の秋

雨すぎてやゝ志めりたる庭石に鶺鴒來なく菊
日和かな

夜ごと〳〵なきほそりにしこほろぎの今宵聲
なく雨志とゞ降る

梅園の梅が香淡きおぼろ夜を艶なる人のうし
ろ影かな

まな娘みやこの人にとつがせて此秋さびし月
のうたげの

今日のこよひ夢にはあらじ二人していでゆの
山に夏の月見る

あけぼの

村の子がいたづらがきの人の顔月にさびしき
地蔵堂かな

ふるさとの昔の友のたづね來てむかしを語る
秋の夜の雨

里の子が濁して去りし枝川のつゝみさびしき
月見草かな

病む人はまばしねむりてみとり女の毛糸あむ
夜を秋の雨降る

春雨小傘

畑かへす賤が鄙うたよくきけばやさしき戀の
調なりけり

美しき少女に化けて小狐の花のかげ行くおぼ
ろ夜の月

傘と傘あひてとまりて別れけりひとすぢ道の
雨の夕ぐれ

あたらしきはこべ啄ばみ朝日あびて籠のかな
りや思ひなげにうたふ

畑にいでて朝夕望む秩父山甲斐のむらやま雪ふりにけり

つゝもてる狩人ひとり嫗一人汽車の中さびし朝寒くして

さびれゆくいでゆの宿の秋風に老いたる湯女の物おもひ顔

茶摘むをとめかほよき山城や宇治の春かぜ戀の歌吹く

うす雪は小雨にとけてうぐひすのさゝなき寒き藪かげの道

をさなどち草花つみし野はなくて鍛冶屋居酒屋町となりにけり

野ら犬の遠聲さむき志おき塲の枯木にほそし片われの月

春さむき笹子峠の七まがり雨降りいでてきゞすゝ志ば鳴く

縁日の夜のにぎはひよそに見て師の許に行く
二人づれ哉

今日つくときゝしわが子の舟はつかず湊の夜
風あれまさり行く

うばのすむ家のわらぶき見ゆれども菜畑麥畑
遠き道かな

ふりかへりふりかへり行く順禮のうせし子に
似しうしろかげ哉

この朝けみけしきよくて姫君の窓より見ます
連翹の花

大原や野菊花咲くみちのべに京へ行く子か母
と憩へる

春の夜を舞の衣ぬぐまひ姫のたもとゆおつる
花の一ひら

ほろ〳〵と藤ちる雨の夕ぐれを濡れてつきた
る姉の文かな

山もとの沓掛村を夜すがて狹霧の中をのぼり行くかな（淺間山に登る）

庭鳥の聲のみ道の霜にさえて人いまだ起きず山かげの村（木曾）

なら林くぬぎの林なら林頻白なきて日はたそかれぬ（十津川二首）

尾花かれ石ところ〴〵谷川の流つめたき夕づく日かな

伊東より船いまつきて大島の湊にぎはふ夏のあさかぜ（大島五首）

海そひのひくき砂山名も知らぬ艸の花咲きてあふ人もなし

牛ひきてかへる少女に路とひて島の言葉を又おぼえけり

炭やきの翁の小屋に水こひてなかばはわかぬ物がたりきく

實をつみし少女かへりて夜叉の木の林さびしく日は暮れにけり

幼な覺かすかにある山あらぬ山送りむかふる啜みちかな（備中足守三首）

あすたゝん御暇乞と五月雨にぬれて詣づる母のおくつき

遠つみおや治めましけむ吉備の國中つ國ばら麥秀でたり

志のび音

新井雨泉

あらし吹く空にかゝれる月のごと落居ぬ胸にすめる君かな

あふ事を君もつらしと思ふらむ恨つゆなき二人なれども

道のべの小石いだきて暖めて鶏にかへさむ親鶏もがな

月の夜のあたりさやかに見えながらなほおぼろなる君がなさけや

一夜にして山なり湖のなれるごと覺ゆるものか人を見し我

さす方のありてぞ君は往きにけむ迷へりとのみ人はいへども

纜を君に絶たればあら潮に流るゝ小舟たゞに沈まむ

めぐりあふ老の姿に二人たゞ言葉なかりし夢を見しかな

まだ問はぬ人の心をつれなしと憂しとはなぞも夢に見るらむ

あはれ今日この愁ひもて見まつればたらちねさへにこと人のごと

何となく物に追はるる心地かな行末おもふ燈火のもと

白き翼二人を乘せて月の宮に導かむまでながめをらばや

憂き人ぞ此のち誰か君により物は思はむ思はざらなむ

手まさぐる絹編物のもつれ糸解くに迷ひのいよよもつるる

花のころ人に嫁ぎし姉君の遠き家おもふ春の暮かな

山も越えず海もわたらで老いはてば寐覺やいかに寂しかるべき

まごころもあだし心も知りわかぬ君にはあらじを縁(えにし)なるらむ

小さなる執のへだてに善(よ)き性(さが)も知らず知られぬ人のあはひや

何事を望みに持たば我胸のこの悲しびのまぎれ果つべき

思ふこと結びし夢にわすられてあしたのどけ
き我世なりしを

もの思ふを罪とさとしし往昔のをしへ身にし
む物おもひかな

よそに聞きて傷ましかりし傷ましき人の一人
の今日の我身か

時知らぬまどひのうちに時は來て君ゆきたま
ふ日となりにけり

おとなしく我言ききて歸りゆくうしろで悲し
朧夜の月

面がはり志まさぬ君がまみのうちにほのかに
うかぶかげの悲しさ

此なやみいかにか說きて老いし父に故あるも
のと知られまつらむ

落穂

村岡典嗣

あけぼの

言に出でてまた慰めずさかづきをすすむる友
を嬉しとぞ思ふ

物思ふ思のやみのまさご路にたふれてぞ聞く
あら波の音

冬枯の枯木とともにこの身一つ立つともたれ
かあはれとは見む

雨細き山越の道すががさにふれてこぼるる白
ふぢの花

志かりとてまたあひがたき世ぞ君ぞかかるす
くせの悲しからずや

この春もうれひのうちに聞きそめぬ衣縫ふ窓
のうぐひすの聲

まごころのそのうれしさにむくゆべくは捨て
て惜しまじ半生の學

打いでていはぬ思をくみて知りて泣きてくる
る友たゞひとりだに

ほほゑみてわが物がたり聞きにけむ花のおも
わはめに残れども

たゞふたりうき世をよそに語らひしこの二年
は夢にかありけむ

ともし火の花の都の人波にものおもふ身のま
ぎれゆくかな

船ひとつ狭霧にきえしその夜より聞えずなり
ぬつまごとの聲

思ひかね見あぐる空のいづこにか通ふ心の道
はあるらむ

心なき千人百人忘れよといふともいかで君を
わすれむ

雨そゝぐ磯松林たそがれを島の少女がたきゞ
こるうた

この島にわが身かくれてかへらずばせめては
君も思ひいづらむ

幾月をさびしき島の島ずまひ忘られがたくな
りし人かな

島人のおくつきもりて今もなほ咲き匂ふらむ
おほ嶋つばき

そのかみを思ひ出でます事はあらむかずなら
ぬ身は忘れますとも

いとたちて緒琴くだきて人の世にすくせはか
なき身をば泣かばや

うれしとも人の心をおぼえつるそやうきこと
のはじめなりけむ

もゆる火の灰ときえゆくあと見つゝ思は深し
くだちゆく夜半

島かげの寂しき村の松林波くらき夜をふくろ
ふのなく

今更に世のつめたきをうらむなるわがこゝろこそ恨めしきかな

何事を思ふにも堪へず今はたゞ消えよとぞ思ふつゆとこの身の

何事も知らでおくります父君のみかげ悲しき汽車の窓かな

おぼつかな我にもあらず迷ひゆく旅路の果に何か待つらむ

世にそむき人にそむきていでてこし旅ぢ悲しき山北の雨

旅の宿にうれひに堪へでひとりのむねぶりぐすりのなど去るしなき

君とほく旅にゆきしや世の中に悲しき事のはじめなりけむ

この幾月おぼえざりつるゆめごこちねざめ靜けき遠なみの音

友おほき都うしとにあらねどもなほ山里の住
みよかりけり

かくれすみし村のたくみがのみのあと殘るも
さむし山門の雨

へだてゆくこの川一つはじめにて千里とほく
や君のなりなむ

書に之きし君うらむとにあらねども殘されし
身の寂しかりけり

さりげなくなだめて君をかへしつるあとたゞ
ならぬわが心かな

月霞むいその松原おぼろ夜を物おもふかげの
たゞひとつゆく

見そなはせほゝゑめる花舞へるてふ人ならぬ
ものぞうれひなげなる

人の世の暗にまよへるわが身にはまばゆから
ずや春の光の

いかにして寂しきかげの宿るらむかく美しき
君がゑまひに

大海原くれなゐもえて七島に炎ふきけむかみ
代をぞ思ふ

ほのくらき小路のかげにたゝずみて君を見送
るよひづく夜かな

たまだれのをごとおす手を打とゞめ思ふや何
の思なるらむ

打さわぐ木立の中にたてれどもひとりぢづけ
きわがこゝろかな

たのまじとおもひつゝなほ頼まるゝおぼつか
なさもなやみなりけり

まゝならぬこの世のさだめこのこゝろ此眞心
も語るよしなき

松かげのあした涼しき露にぬれて君とゆかば
やなでしこの濱

別れかね君おくりゆくたそがれの野道うつくし野いばらの花

ふきあるゝ沖の嵐はさけしかどよるべなき舟の身をいかにせむ

紅のともしそむけて打むかふをごとにおつるわが涙かな

まゝならぬこのうつし世をもろともに泣く事すらもなしがたき世や

君をおもひ思ひつかれてねぶりては君のみ聲にまたもさめつる

はげませどむちうてどつゆかひもなくつかれはてたる心いかにせむ

わが息のつゞかむ限さけびなば答ふる聲を聞くときのあらむ

別れ路の今日のこよひの悲しさをみそらの月やひとり知るらむ

うつし世は悲しきものと今日まではかく志み
じみとおぼえざりしを

かへりみれば頼まるゝ方もなきにあらずなほ
行末は神にまかせむ

われ知らぬ夢み心地に別れしも殘る惱はうつ
つなりけり

いざさらばさらばとばかり言葉なく世のうき
方に君をやりつる

うれしとも君がまごころうけつゝもこたへま
つらむこの身ならずして

いたづらに思はじいはじ人知れぬ深きこゝろ
のあるにやあるらむ

もえ殘る炭にも似たるこの心いつかもゆべき
いつか消ゆべき

志るしなきものは思はず醉ひていねて夢にだ
に見む君がおもかげ

いざさらばあひ知らざりしそのかみの二人の
人となりもはてなむ

たゞふたり君と我との森の國梢ふく風うぐひ
すのこゑ

君を待つ森の下かげ夕月のかげほのかにもあ
らはれし君

あひあうてまた別れゆく駿河の海なみ路をぐ
らく春雨のふる

山も河もわが心をばなぐさめずまたかへり來
ぬ君います里

夜あみひく磯邊の海士に交らひて胸のなやみ
をやる夜ごろかな

おくふかくつゝめる胸の悲しさをさやかに照
らす大空の月

常闇の世とし思はゞ中々にめしひたる身のや
すけからむを

言葉なく君とたゝずみし彼の磯に今もその夜
の波は寄すらむ

人の世のかゝる樂しさ君なくば知らずやあり
けむかゝる悲しさ

來し方の忘られがたき人々の面わぞうかぶと
もし火の前

なか〳〵にすめる鏡の心ゆゑくもりがちなる
この世なりけり

うつくしき夢やぶられしわが胸の底ひ吹きま
く木枯の風

幾年を書につかれし眼もて見るめ樂しき春の
海ばら

けがれたるこの世そむきてまたまばしこの海
山に心まかせむ

別れゐて思ふ思の樂しさを今はた知りぬおぼ
ろ夜の月

打むれてかもめ飛びかふ春の野のかなたに遠
し沖つ島山

悲しびの深き山路も諸ともにたどると思へば
樂しからずや

おなじなげき同じ思のゆく末もかくや照るら
む大空の月

わが胸の望と共につまごとも捨てゝひさしく
なりにけるかな

花かげにひとりかくれてこの春を心のかぎり
泣きくらさばや

をごとひく君がまそでのゆらめきにともしび
匂ふ春のよひかな

うつし世に堪へぬこの身のかくれがは君が心
のおくかなりけり

別れ路の夕日にはえし君が面のゑまひぞうか
ぶ松かげの道

君をおもひおもひあかしゝ花かげにこの世と
もなき鐘の音かな

思ふまゝに泣きし笑ひしそのかみのわが心こ
そ戀しかりけれ

つくづくと思に堪へで眺めやる星の光のあま
りつめたき

ものうげにくもれる眼我ながら我うとましき
昨日今日かな

胸に滿つ思はとほく空にやりてひじりの書に
またもむかふかな

相思ふこのまごころの光もてやみのこの世を
照らさましかば

人の世に我はあて人人の世に我はとみ人われ
に君あり

君がため買ふや藪原お六ぐし又わけたどる小
木曾路の雨

いざさらば涙はらひてさけびなむ世にもまれ
なる幸を得し身と

おかすがに今の惱は堪へつべしその行末を如
何にすべけむ

見れば聞けば思ぞまさる今はたゞこの目この
耳おひよとぞ思ふ

中々にかくてし死なば人の世に幸おほかりし
二人なるらむ

心あらば又わがために説くなかれ恨はおほし
するが路の春

始皇帝

小花清泉

燕韓趙楚殘りなく
皆秦國に合されて
四海波風穩やかに
始皇天下の君となる

阿房の宮は造られて
歌舞管絃の絶間なく
美人三千かしづけば

始皇榮花の夢うつゝ
夢は忽ちやぶれたり
無常の感は起りたり
眞珠の椅子に寄りつゝも
始皇憂ひに沈みゆく

勝ち誇りたる帝王の
額に髮に手に足に
老は來れり死は迫る
始皇歎じて思へらく

長城萬里きづかれて
匈奴の敵は防げども
さはれ老死の大敵に
いかでか朕の當り得べき

童男童女諸共に
蓬が島へ使して
行きし徐福は歸らずや
不死の藥は得られずや

坑夫

こゝは地の底數千尺
足尾の山は上にあり
渡良瀬川の水源の
早き流も上にあり
地面に通ふ隧道の
道は今來し闇の道

たどり〳〵て行く先の
闇はいよ〳〵奥深く

道はます〳〵枝多し
たづさへ持たる燈火の
弱き光を命にて
進むや遲し一歩二歩

造化秘密の寶藏
岩の扉は固けれど
岩うち碎きうち碎き
かね堀いだす處あり
かね堀る處近づけば
幽かに響く鎚の音

十萬億土隔たりて
物いふ如く遙かげに
坑夫の歌ぞ聞えくる
言葉のまらべ面白く
『越後出たときや涙で出たが
今ぢや越後の風もいや』

一刹那

名利に迷ふ市人の
行きかひ繁き橋の上
車は走り馬は馳せ
とどろ〳〵と鳴りひびく
橋の下には流あり
清き流の川もに
小舟うかべて糸たれて
今日も釣する翁われ

ゆるく流るゝ水の面
打見まもりて魚待てば
竿の穂先のゆらぎつゝ
小さき鈴の音するに
引きやあげんの一刹那
人間萬事忘られて
老いても消えぬ我戀の
痛さも少時癒えぬめり

我友

我に向くべき面なしと
姿かくせる我友よ
面なき事のなどあらむ
罪は世人の習なり

君にいかなる罪あるも
友なる我は賤しまじ
小さき事に恥ぢらひて
いかでかくれし我友よ

來なれし君は來ずなりて
聞きなれたりし笑ひ聲
窓の内外にひゞかねば
さびしくなりぬ我が書齋

かく思ひつゝ十年過ぎ
二十年あまり過ぎぬれど
友の行方の知られずて
生死も更にわかぬかな

旅籠屋

長き年月流浪して
旅に老いたる末つひに
故郷へ急ぐ道すがら
この山里の旅籠屋に
きのふ宿りし翁びと
ふるき枕を枕にて
さびしき床の夢に見つ
おそろしかりし過去の事。

富も位も取りつべく
朽ちせぬ名さへ得らるべし
花の都にとくこそと
今宵やどれる若き人
樂しき未來夢に見つ
おなじ枕を枕にて。

朝月夜

片山廣子

わが世いかでするおだやかに樂しかれ夕日の
空に飛ぶ鳥の如

末知らぬ野みち山みちいづれにか神のめすら
む方に行かばや

はてもなきみ空行く雲をり〳〵は長き旅路に
たゆみはてずや

うち眠るわが子の寢顏ながめつゝ命を惜しと
思ひそめぬる

花もなき身は道の邊の名なし草朝日あふぐも
まばゆからずや

春の海憂ひにみてり病む人の病たすけて磯に
たてれば（鎌倉にて）

幼子の人となるまで願はくは此子の親にいの
ちあらせよ

よろこびて君がため死なむ女ひとりあるもあらぬもかはりなき世に

風もなく人なき濱に月更けてねぶりもよほす浪の音かな

阿佛尼の家あと訪ひし歸るさのつとにぬきたる山つゝじかな

つるが岡高き宮居に老杉に百羽の鳩に春のかぜ吹く

君をして十とせ此世に立たしめば我が百とせも何か惜しまむ

鳩あそぶ大御やしろにぬかづきていのるいのりもたゞ君がため

あやしくもこひしかりけりさきの世は神のゆるしゝいもせなりけむ

大空の月をまたふに似たる哉これをも人は戀といふらむ

忘れむと思ふに消ゆる思かはいきの限は君を
おもはむ

たゝずみて望かたりしいちじくの廣葉の蔭の
夏をしぞ思ふ（幼きよりの友のうせけるを悼みて二首）

三河なる渥美の野邊の春の花新（にひ）おくつきを飾
れとぞ思ふ

南より北吹きとほす大寺のひろ間ひらきて書
を讀むかな

露ぢげき花野の虫よ花かげにみ空の星となに
語るらむ

きくまゝに胸の思もやすまりてやみ夜あまね
き雨の音かな

心老い身はおとろへし今にして君にあはむも
やさしからずや

世にふれどあるかひもなし人の親の女を生む
は罪にあらずや

のちの世は蝶ともならむ塵ともあれ物おもふ
人と又はうまれじ

つくられしにひあめつちの朝ぼらけまづきこ
えけむうぐひすの聲

かぎりなきこの天地のたゞなかに命をうくる
たふとからずや

人志れず花にあはれはかけぬれどおかさぬ罪
よ神もゆるさむ

空にまよふやみの思ひをかたらむに月も泣く
べし人の世のこひ

いくたびか花なす望地に落ちてはやく老いた
るわかき人かな

戀しさのまぎるゝ事もありやとてきのふの文
をけふも讀む哉

巣鴨より染井に通ふわかれみち秋の日うけて
荷馬やすらふ

つれ〴〵の我が世にあきし春の日を小切れきざみて小猿ぬふかな

やはらかきちごのねいきを耳にして遠き生ひさきおもふ夜半かな

思ひいづる十とせ昔の春のゆめ夢みしころの身にもあらぬを

かくまでに悔ゆる心を君知るや君におかしゝうつし世のつみ

わび人よいでてをろがめ足引の山にも野にも春の日の影

竹の中の小さき姫のみかさにもさゝせまほしきふきの若葉や

春の日にゐねぶりおはす石佛うしろも見ませ椿さけるを

靜なる谷間の草のそよぎにも兎住むやと幼兒のきく

小川町五十の宵のにぎはひに思はず見つるそのかみの人

おそろしき夢よりさめて聞きしかな靜かなる夜の五位鷺の聲

岩のみとよそめこゞしき荒山にもゆる春艸人去るらめや

神います白旗山の二つ松ふたり見つゝもかへるうれしさ（鎌倉を去るとて）

羽虫とぶあぜの小道の朝露に咲きこぼれたる空色の花（大森にうつりて）

紅唐紙ちさくきざみて幼兒と花散りうかす里川の水

二十年手なれたまひし杖のみをつひの御とも に立たせつる哉（父にわかれて二首）

世を捨てつ世に忘られし父君の御墓かざらむ白百合の花

冬つきて春うまるべき喜びに落葉まひをどる
木枯の風

小春日を山蕗の花咲くらむか藤澤がよひゆき
なれし道

天つ空ゑめるが如き秋の日に二人稻かる賤と
しもならば

秋の雨つめたき朝を二人して廊に經よむちさ
き僧かな

長月の長夜のすさび七年も忘れし人にふみを
かきけり

つくづくと過ぎこしかたをきのぶれば花の香
のこる春のおもひで

思ひ出づる人しもあらば嬉しからむわがなき
のちのかゝる月夜に

水なくてきをるゝ鉢の花のごと心かれゆく我
と知らなむ

涙なく恨もあらぬ天つ國に女ありやと神にとはゞや

我たから多くあればと幼兒の猫にゆづりし古てまりかな

この姫の夫(つま)となるより荒(あれ)馬にのりてゆかむと人申しける

秋の王白菊の君榮つきて世は霜の代にうつりけるかな

鎌倉やますらを眠る谷蔭にぬきてかへりし水仙のはな

春日町ごむの木かすむ雨の日を破(や)れがささして行くめしひ哉

梅かをる垣根ゆかしもその昔信乃すみしてふ大塚の里

打絶えて忘るゝまでになりし人春風ふけば待たれぬるかな

にごりたる思ひは持たじわが胸にやどれる人の影もくもらむ

歸る雁わが故郷にことづてよ身はまさきくて心病めりと

右は山ひだり廣野の別れみち別れし二人わすれ草つむ

たばこ吸ふ翁のせなに菜の畑に七つさがりの春日うらゝに

かれ草にわか草まじるはたけ道梅見がへりの女づれかな

くぬぎ原木の間洩り入る夏の日の動く影ふむひよ鳥のむれ

秩父山空にかすみて古里のあら川づつみ花さきぬらむ

わがせこがやまひを得つる牛込の矢來の里はうきところかも

あけぼの

三とせ我かり住居せし長谷寺のみ山のかげの
草の家おもふ

松風は涙の音ふきぬ松露うる嫗にあひし藤澤
のみち

なが月や虫なくなはて六郷にお花嫁(ゆ)く夜のと
もし火の影

むらさきの日傘かざして都びと夕日にかへる
菜の花の道

朝月夜

わがむねの奥にちひさき宮たてて君を神とし
ひそかにまつる

妻と二人黄金かぞへてよろこぶやあたらます
らを老いはてにける

一時に二人みたりをおもふ君御心ひろしほと
けに似たり

神と魔のたゝかひの世ぞたゆたひておくれた
るをばきりて捨てなむ

人の世は神の世となりみち端の石も花咲く春
をまてとや

髪たちて男さびして酒のみてわがおもふこと
いはむとぞ思ふ

むらさきの袂かへして若きどち見し世戀しき
花の色かな

君がむねに何ひそむらむあぢさゐの木蔭に眠
るくちなはの如

わが涙雨とそゝぎてうら枯れし草の一葉もよ
みがへらせむ

まつはれる蔦の葉ちらば木枯のいよ〳〵寒く
松を吹くらむ

責むな君かはるならひの男心に百とせおなじ
人思はめや

かぎりなく遠きみ空の秩父山雲かと問ひし古
里の道

あけぼの

越後路や阿賀の川邊の朝月夜あさ立つ父をおくりけるかな

はたちにて母めしましゝはれ小袖ぬひあらたむる秋の夜の雨

父君の御手あぶりましゝ古火鉢用ひずあればつやうせにけり

落椿ふとねに敷きて小雀のなきがら埋めし故郷の庭

朝月夜

あやまらずすぐなる道にみちびけと神の給ひし小さなる人

池上や千部經よむ春卯月霞む野路ゆく人のむれかな

あたゝかきシリヤの野邊の春の花神の代のごと今も咲くらむ

南なるろしや山國たをやめは多くいづてふ行かせ殿ばら

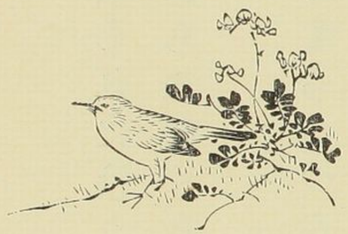
人死にていくさ勝ちけむ海の上もこの秋風は
吹きて來つらむ

いかばかり人の涙のかゝるらむ染井の野邊は
草青きかな（染井に詣でて）

ほこりにし黑髪おちてうちむかふ鏡のかげの
ふけにけるかな

いさゝかの病をとふなそのむかし心は死にて
殘りしからぞ

春雨に思ひぞいづる昔わが生れし家のまら藤
のはな



にげゆくかげ

橘糸重子

つまれけりすてられにけりふまれけりすくせ
つたなき名もあらぬ花

思ひあまりふともらしつる一言をくむ人あり
と思ひかけきや

さらに深き谷になげんと志ばし我をさゝへし
手にもすがりつる哉

つめたきは石のさがなり何しかもそのつめた
さを恨みたりけむ

いつはりの人の涙をぬぐはんとかたぶけはて
しわがまことかな

夢にあひし人もやあると夢に似し林のあたり
そゞろさまよふ

いひ志らずうるはしかりき志かはあれど短か
く消えし夢をしぞ思ふ

うばはれん爲とも知らずとこしへにあたへられつと思ひけるかな

限なくうれしと思ひし一時の思ひ出つらき夕ぐれのそら

かなしさの限をきゝて別れ來しその夜おぼゆる雨の音かな

わがうれひ忘れて人の上に涙をそゝぐ夕まぐれかな

さりげなくさらばとのみに別れゆく人の情を悲しとぞ思ふ

人忘れず人のまぎれに見おくりて忘づ心なきわが思ひかな

忘ばし世のおきてのまゝに別るとも友とばかりは思ひ出よ君

わくらはに人と生れしわがすくせ此すくせこそ悲しかりけれ

また一日苦しき命加ふべくあけゆく空のうら
めしきかな

この上の何のくるしび何の恥ぢのびつくしゝ
世にしあらずや

なるまゝになれよと且は思へどもなどこの思
打すてがたき

胸に滿つわがこの思ひなくばいかにやすけか
るべきさびしかるべき

天も地ものろひの聲を叫びいでてわが身あざ
ける木枯のかぜ

ゆきあひし小さき柩人ぢれず群にはなれてお
くりゆく哉

われだにも思ひすてつる我ぞかし人の友たる
身にしあらじよ

世の人はよし知らずともわが心なきものにし
てひとりぢのばむ

わがすまば苦しき事のさてもありやよそめた
のしき山かげの村

いはぬおもひいはぬなげきのもしあらばひそ
かに語れ山吹の花

ながれ來しさゆりすくふとおりたてば岸の土
くえて花はくだけぬ

見おろせど闇の谷底何も見えずみえぬ力の我
を引入るゝ

胸の底にひくゝするどき聲ありてわがかひな
さをあざけるがごと

幸なさの我に似し人もしあらば語らんと思ふ
わが思かな

とこしへにげゆくかげのあと追ひてむなし
き道にうき身つかれぬ

わが病いえずときけど母君も今はいまさず心
やすきかな

かくまでの我身のはてを見ても思へみなしご
安くすごされん世か

花の香にうつら〳〵とさそはるゝねぶりよと
はにさめずしもあれ

涙なく悔なき一日もしあらば其夕暮に死なん
とぞ思ふ

思ひ〳〵思ひつかれて墓に入らば苔の下にも
思ひつきせじ

情あらばとふなあばくなうき事の限をひめし
胸のおくつき

たづねきて誰かはきのぶわが墓に文字もあら
すな石もあらすな

ゆふもや

井關照子

あ け ぼ の

戀ひ〳〵て出でし都の春十年ふたたびかへる桑多き村

つらかりき年の七とせつらかりき狂はでありし心あやしき

人戀し花野の春を人戀し別れし去年の夕もやの道

ゆ ふ も や

海越しに秋の富士こきなぎさ道夕汐かなひ君が舟出でぬ

藻かり舟よき唄のせて川くまのあしまを歸る十六夜の月

花はたゞ笑みてきくらし答ふらしあてなる蝶のさゝやきや何

つくづくとうき身のはてを思ひみればながらふるはた罪かとぞ思ふ

あや雲のくれなゐうすれうすれ去りて江の春
ゆくや鐘のひゞきに

たゞ二人こゝに住まばやゆく春の雨の名残の
山吹の村

鳥一つ飛び來り又とび去りて秋の日ひくし岩
の上の宮

むろ咲きの緋桃白桃ちりにけりひゝな納むる
春のゆふ風

鶯はなく日なかぬ日君戀ふる我身にありや涙
なき日の

杣人が谷間の斧の遠ひゞき沙彌があかくむ山
寺の庭

日あたりの御寺のかどの垣根道かたゐねぶれ
り茶の花かをる

落葉には何らの恨木枯のいづこまでもと追ひ
てゆくらむ

あけぼの

眉白きいはやの隱者峯の上に咒文となふる木枯の風

征矢とちるいてふ黄金葉笠にうけて旅僧たどる秋風の道

はしけへと母が御手とる棧橋のさむき夕べを千鳥ぞ鳴く

一つ一つ君が名彫らんあたゝかき春を咲く花其花びらに

ゆふもや

祈るとも消えじ我罪いのるてふ君が御言を悲しとぞ思ふ

思ひつゝ思ひかねつゝあゆみよる築地がもとのなでしこの花

此思ひ君とかたらむ天つ國常世の春の花かげにして

都へと君ゆきましつ春は暮れぬ一人たゝずむにつゝじの山

夏の夜の虫は火による世の中の人といふ子は
名に富による

葡萄植ゑて羊育てゝ廿年の田居の春秋わが髪
ましろき

うつし世に置きどころなく思ふ身のむねにや
さしき月の光や

秋風のま萩野越しに富士見えて初雁がねのさ
むき朝けや

ほと〳〵とおとなふ聲はわが門か芙蓉花ちる
雨の夕べを

春雨に梅の小窓を細うあけて報謝さゝぐる人
うつくしき

雨さむき里ゐの春のつれづれに折りていけた
る小てまりの花

かたらんにあまりやさしき思かな語らば月の
ほゝゑみやせむ

夕雨やあくた流るゝ川くまの淀みに咲けり河骨の花

まだなれぬ學びの窓の宵月夜ふるさとこひし時鳥なく

志めりたる苔の香さむし星月夜かまくら山のおくつき所

島又島舟こゝかしこ繪のごときいその遠あさ秋の風ふく

せめてだに虹のあや橋かけわたせ君が舟ゆく夕日の嶋へ

秋風は志のび跫音に吹きよりぬまたるゝよひの人ごこちして

神かその小さきさゝやきおぼろ夜の花の下ぶし今さめしゆめ

春悲し花の吹雪をさながらに君と別るゝおぼろ夜の月

二人してわかれを泣きし江のほとり去年のわらやの紅梅の花

つくづくと我世ものうくなりにけりうきに心のつかれはてけむ

史(ふみ)にはえを志るしゝうてな今いづら溪をめぐりて春の風ふく

軍神さけび狂へる野の夕べ空には星の光つめたき

時めきしそのかみ思ふ朝の窓露の芙蓉にやせし蝶とぶ

夢かそもうつゝか我身後の世の見ぬ世おぼゆる花かげにして

病みて聽く秋の雨夜の虫の聲旅なる我せ今宵いづこに

舟の窓夜ごしの雨の空はれてとび舞ひのぼる秋の朝風

みやしろにつゞく杉山ひの木山せみの聲わく
朝ぎりの山

つがね髪春まだわかしさゝにごる田川の岸に
せりつむ少女

五百重波千重波ぢきるわたの原高照る月に雁
なき渡る

今つきし夜舟を上る人聲のくらきに消えて時
雨ふる橋

ぢきつめし若草むしろ美くしき野もせにはゆ
る春の日の色

花ありて春うつくしき春ありて人のこの世は
とはに樂しき

占とひて君こひまてば秋の磯夕べのくもに鴈
なきわたる

かくばかりおもふおもひを知りますかいのち
のかぎり待たんとまでに

春風は花藻玉藻の香をのせて吹けやわが背が
召さん舟邊に

冬姫が天ゆはなてる百千羽の白鳥舞ふよ百千
白鳥

君の君御代ぞろしめす春にあひて櫻咲き滿つ
大八しま國

花の國やまと島根の春にのみ神のさづけし花
さくら花

姫蔦

吉光寺朝子

つらかりし人の心もやはらぎて共に花見し夢
を見しかな

荒らましき野風川風霜夜風ふかれて君の歸り
ますらむ

君が幸君がはえをば祈るかな我世は夢よ誰を
恨みむ

後の世のありとは聞けどいかならむ此世の如
くつれなからずや

わすれては君を訪はんとおもひけり去年なつ
かしき朧夜の月

母君のいたづき癒えて御ぐしけづるあした嬉
しき鶯の聲

いもうとになほす振袖おぼろけの昔こひしや
肩あげのあと

荷あげする舟子が妻のみだれがみ花の二十の
はえもなくして

いもうとのたもとゆはへて拾ひけん姿も見ゆ
るふるさとの栗

うせましゝ母君の上乳母の上かなしきことの
又うかびくる

うつしゑも文もことゞ焼き捨てついつまで
のこる涙なるらむ

病める友なぐさめかねて歸りくる夕べの野路
の野いばらの花

何となく人ぞまたるゝよべの夢にさも似たる
かな花野この道

身はうもれ人はそしるもつらからず君がうた
がひいつかとくべき

白き蝶の行方おひつゝ見いでけり蘭の香清き
山の井の水

いばら生ふるこゞしき山ものぼらましやさし
き君が御手にすがりて

打みつゝ笑みしおもわの見ゆるかな弟(おとうと)かなし
柿いろづきぬ

うつむけるすがたさびしき姫蔦の一人はなれ
て何おもふらむ

三日月のあはき光に照らされて何おもふらん
橋の上の人

花園の香につゝまれて語らひし夢よまことの
わが身なりせば

心なく打ちたる水にありのむれ道をぞまどふ
あなたこなたに

あらぬ事人はいふともそしるとも我はきのば
む一人子のため

病いえてそゞろ筆とる窓のもと若葉すゞしき
朝風ぞふく

いさぎよくうき世さらばと思へどもさりての
後のいかゞあるべき

この頃をいかにしつらん朝戸出にいつも行き
あひし花うり少女

心なくたれか折りけむ折れながら猶も匂へり
きちかうの花

打むれて飛ぶかかはほり夕ぐれのきばしの汝
が世いかに嬉しき

終日の風は堪へしを庭椿夕べの雨に花のおち
にけり

門過ぐる翁の車呼びとめてさてまよひたる花
撰かな

をさな子に唱歌教ふる南椽かぜにちりくる姫
桃の花

たが妻か誰が子の親か夕ぐれの雨にぬれ行く
とむらひのむれ

夕がほの花さく門の夕すゞみ此處も賑はし軍
がたりに

歸るとふ友をとゞめて物がたりさらにつゞく
る秋雨のまど

幼子のいつか寐入りしまくらべにならびすは
れる犬はりこかな

夜をまもる拍子木の音かすかにて暗路をはし
る木枯の風

わすれたるまばしのねぶり又さめてうき世に
かへる胸のくるしさ

風をいたみ明日の舟出を思ふ夜の湊江ちかく
千鳥ましば鳴く

ちりの世をはなれぬ身さへ暫らくは清く涼し
き朝心地かな

まだ見ねど栃木は君のいます方そゞろ心にゐ
がきみるかな

終日(ひねもす)を急ぎて縫ふは人の衣(きぬ)いまいかならむ荒
野べにして

いさぎよく死ねとのたまふ母君の我なき後は
いかにましまさむ

緒琴とればそゞろむかしのわが身かな桃ちる
窓の月ましろくして

あこがるゝ心のまゝにいざ行かんみちびきが
ほや春の蝴蝶の

花うばら物いひたげのさまなるを知らでや水
のいそぎ行くらむ

うつりこし若き女夫のわらひ聲となりの貸家
春めきにけり

駕籠とめてなでしこ手折るいでゆ道かすかに
ひゞく谷川の音

磯ぎはにくだけし小舟ながれつきぬ乘りて出
でしは誰が背なるらむ

あきつ飛ぶ里の小川の岸づたひ亡き子の友の
今日も遊べる

町はづれまだ家たゝぬ燒あとに殘りしつゞし
花さき匂ふ

まどたゝく雨にめざめて幼子にきぬかけてや
る夏の夜半かな

子らのゆきし森の神樂ぞきこゆなる蚊やりに
むせぶ夕がほの宿

青桐のおち葉が上に霜みえて手さきつめたき
朝清めかな

いくたびか風は梢をさそへども唯ほゝゑみて
こたへなき花

かけそめしをす捲きあげて病む君に葉ごしの
月を見せまゐらする

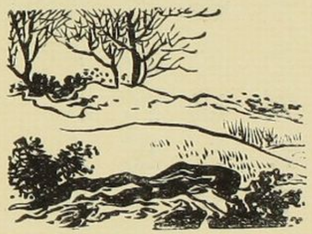
子らのうたふ京のまり唄おもしろみ幼な心に
ふとなりしかな

緋桃

大塚楠緒子

人は捨てられ人を捨て、
月はあこがれ露は泣き、
少女は戀の成らずして、
いつしかあだに舊りゆくを、
昔少女のわかやぎし、
二八の春をたとへける、
宿の緋桃は春毎に、
色こまやかに枝たわに、

珊瑚を飾る花美しき。



すて石

冬は枯るれど春芽ぐみ、
夏は繁りて秋みのる、
この天地をよそにみて、
同じ處に同じ影、
同じ形に同じ色、
雨の降る日は雨に濡れ、
風の吹く日は風のまゝ、
鳥をとまらせ、鳥來れば、

人を休ませ、人來れば、
育ちもやらず減りもせず、
花も咲かねば實も生らで、
倦まず動かず道ばたに、
寢てか醒めてか圓き捨石。

華嚴

火を降らし灰を吐き、
山裂けて渦まく湖の、
叫び哮り落とし〻大瀑布、
年を經てこゝに幾とせ、
名は呼べり、
華嚴とぞ。

あゝ華嚴、華嚴八千尋、

かけわたす大白布に、
なにを隱し、なにを閉せる、
胸を打ちて汝にひれ伏し、
智に飢うる、
人の子あり。

風に和し雲に答へ、
天に語り地にさゝやく、
興やなに、やよ興やなに、
人にのみ秘めて强れなの、
氷なす、

水のつめたさ。

時ありき、さはれほこらむ、
凄まじの汝が懷に、
安むじて守ると爲しゝ、
天の默示、地の記錄を、
讀みに往にし、
人こそあれ。

想持つ人の子ぞかし、
煩ふは高き煩悶、

憂ふるも深き憂愁、
時ありて瞳据ゑては、
ものかはの、
大瀑布千尋。

くれなゐの頬や動きし、
こみどりの眉やにほひし、
百尺の巨巖の上に、
立ちぬるは一少年、
飛沫受けし、
そのほゝゑみ。

あゝ神秘、神秘のとばり、
蹴はなちて入りし水底、
うたがひはさても解けしや、
往き往きて、往きにし彼れは、
かへらず、
この世に。

星なりし、玉なりし、
花なりし若き齢を、
のろはれし、物の呪か、
ねたまれし、物の妬か、

あまりなる、
ゆく迹よ。

あゝ華嚴、いみじの犧牲に、
智の庫の鍵やあたへし、
聲たかく何を嘯く、
安らかに彼れ眠れるや、
語れ、語れ、
あゝ、世は憂し。

お百度詣

ひとあし踏みて夫思ひ、
ふたあし國を思へども、
三足ふたゝび夫おもふ、
女心に咎ありや。

朝日に匂ふ日の本の、
國は世界に只一つ。
妻と呼ばれて契りてし、

人も此世に只ひとり。

いづれ重しと問はれなば、
たゞ答へずに泣かんのみ。
お百度まうで
あゝ咎ありや

夜

鬼あり、そこにのろふべく、
罪あり、そこにさかゆべく、
悔あり、そこにもだゆべく、
戀あり、そこにくるふべく、
日の影恥づる人の子の、
地にひれ伏すその惱み、
思ひのまゝにうちなやむ、
秘密をかたくとざすため、

窺ふがごと、忍ぶごと、
音なく落とす黒衣は、
問はゞ答へむ夜のめぐみ、
夜の情にあらざるや。

一六二面第二首結句は身にしあらずやの誤

明治三十九年六月廿五日印刷
明治三十九年六月廿八日發行

あけぼの
定價金五拾五錢

編纂者　佐々木信綱
發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地　鈴木種次郎
發行者　大坂市南區鰻谷中ノ丁廿三番地　鈴木常松
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市神田區錦町一丁目
大阪市南區鰻谷中ノ丁　修文館

不許複製

歌集 おもひ草

金五拾貳錢

竹柏園主佐々木氏、頽俗奔波の間に特立し、その操守を變ぜず、革進の旗幟をたて、清新の想と馴雅の調と、其特色を發揮して、益々純固の域に至らむとす。こゝに十數年來苦心の作を集め、思ひ草一卷を出さる。あるは惱みある人の胸に限なき慰籍を與ふべく、あるは險しき世路に活らきて、休を求むる人の心に美妙の調を傳ふべく、もしそれ延いては、現今歌壇の面目を一新するか得べきか。

竹柏園集 第一編 第二編

各金參拾六錢

心の強き人、弱き人、美しき人、清き人、さまゝゝの人相あつまりて、竹柏會といふ詩文の會は組みたてられぬ。會員の中には、專ら詩の神に生涯を献ぐるあり。詩歌には緣遠き職をとれるあり。畵工あり。ピヤノひく人あり。山深き里の僧侶あり。廣き林檎畑の主人あり。かつ耕へし且歌ふ農夫あり。かゝる人々相つどひ相語り、若しくは消息の贈答に、歌文を研究せること既に數年。こゝに會員の短歌、新體詩、日記、紀行、スケッチの類をあつめて、其第一編第二編を出しぬ。素より小冊子に過ぎずと雖も、あるは心なやめる人の友となりあるはさびしき旅窓の好侶伴たるべきか。

日本歌學全書

全部十二卷
一卷各金參拾錢

こは、萬葉集八代集をはじめ、家集百首歌合歌論等四十部をあつめ、佐々木氏の標註を加へられしもの、總紙數五千九十四頁にわたれり。

續日本歌學全書

全部十二卷
一卷各金參拾六錢

こは、元祿以後の家集歌論等百四十七部を佐々木氏の輯錄せられしもの、總紙數六千二百七十六頁なり。

日本歌選 上古の卷

近刊

我國過去の文學を研究せむとする人はもとより、或は新詩形を興してわが國將來の文學の爲に貢献する處あらむとする人々にとりて、最も重要なる事の一は、我國韻文の基礎たる和歌の研究なるべし。佐々木氏和歌の研究の爲に專心研鑽せらるゝ事多年。こゝに日本歌選の稿成りて、まづ上古の卷一卷を出されんとす。此卷には上古歌謠史の第一期第二期、即ち紀元前より天武帝までの歌謠を輯錄す。而して凡ての歌を年代種類、及び題目の三つに分類し、祝詞を附錄とし年表、辭類、參考書目等を添へ、かつ上古歌謠史の概觀を載す。我國文學を研究せんとする人の、必須の書なり。

文藝雜誌 こころの花

半年金七拾五錢
一年金壹圓四拾錢

和歌を中心とせる文藝雜誌にして、佐々木氏主幹の任に當り。明治三十一年一月第一號を刊行し、爾來毎月一回一日に發行して今日に至れり。

東京神田區小川町一　竹柏會

石榑千亦君著

二人づれ

武相の山川を寫生せる文、小林畫伯の畫數葉を挿みたり。

正價貳拾錢
竹柏會出版部發行

印東昌綱君著

磯馴松

鏡の浦わにありし折の作、美文三十篇短歌三百首を收む。

正價貳拾八錢
博文館發行

大塚楠緒子君著

晴小袖

小說十篇喜劇三篇譯文三篇を收め、泰西名畫七葉を挿む。

正價八拾錢
隆文館發行

佐々木信綱先生選

和歌玉川集

近刊

さきに佐々木氏が選にかゝりし千代田歌集は、最も廣く世に行はれて歌界を益する所少からざりき。爾來歌壇の形勢日に新に日に盛に、歌集の世に行はるゝものその數さはなれども、彼の千代田歌集に比すべき、その範圍の廣き歌集はいまだこれあらず。こゝに佐々木氏、現時諸名家の作、及び新聞雜誌等に多年選者としてえらび來られし歌の中、清新の作を集めて、玉川集一編を公にせられむとす。名にし負ふ玉川の流にたとへつべき清き歌の數々、無慮二千百首。以て當今歌壇の趨勢を察し得べく、以て初學者の好模範となすを得む。卷首に添へたる三宅克己氏の多摩川の水彩畫は、本書に一層の光彩をそへて餘りあり。

修文館發行

杉谷代水作歌●東儀鐵笛作曲（再版出來）

新曲 太田道灌

美本全一冊
定價金四拾錢
郵税金四錢

蛙鳴く戸塚の里に憂き身を隱す詫住居狩野の雨に簑はといへば、心ありや心無しや、物言はぬ一枝の花は鐵よりも堅き武夫の胸扉を開ひて、一代の英雄は千古の歌人となりぬ、詞章幽婉、曲調清越共に江湖の諷唱を俟つ

坪内博士序●杉谷代水作歌●東儀鐵作曲（四版出來）

新曲 熊野

美本全一冊
定價金四拾錢
郵税金四錢

哀々たる母子の思綿々たる君夫の情、止まらんか將た歸らんか、洛西春蘭にして孝女が心は千々に煩悶す。清心の想優婉の辭、餘韻の哀れに盡さざる處暮れ行く春の姿に似たり。若し夫れ作曲の妙に至ては、東西雅俗の粹を比べ踏襲以外別に一機軸を出して凄婉幽雅、亦極めて國樂と諧和せり、既に各所に演奏せられて好評噴々蓋し樂界稀有の良曲なり。